

「ロン・ティボーコンクールと グラスゴアのバイオリン教授法セミナー」

“M. Long-J. Thibaud.” International Competition and
International Seminar on Violin Teaching in Glasgow.

東 儀 祐 二

本年1975年6月8日に日本を離れ、約一ヶ月ヨーロッパに行って来たが、第一の目的は、6月22日からイギリス、スコットランドのグラスゴで一週間にわたって行われた、バイオリンティーチングのセミナーで、各国からの代表のスピーチやディスカッションで、私も一つのテーマでスピーチしたが、大変勉強になったので其の様子を此処に発表したいと思う。

其の前に6月9日から一週間、パリで行われたロン・ティボーコンクールのバイオリン部門にも、オブザーバーとして出席し、第一予選から本選迄全部聞き、世界一流の若い人々の演奏に接し色々と考えさせられる事が多かった。

ロン・ティボー国際コンクールは、フランスの著名な演奏家ジャック・ティボー（バイオリン）とマルグリット・ロン（ピアノ）が1943年に創始したバイオリンとピアノの為のコンクールで、始めは3年おきであったのが1949年以来2年おきに行われている。バイオリン部門はピアノ部門に一週間先だって行われる。

最近ソ連勢が圧倒的に優勢で61年以降一位優勝をソ連勢が独占している。

今年は20名が参加、内訳は日本5名、ソ連4名、ポーランド3名、ブルガリヤ2名、フランス、トルコ、ガテマラ、アルジェリヤ、スイス、韓国各1名で、日本人は清水高師（毎日コンクール1位、カリフォルニアでハイフェッツに師事）。武谷きみよ（桐朋高校卒、イギリスでY. ニーマンに師事）この子は私が小学校の2年位から中3まで教えていた。

天満あつ子（昨年毎日コンクール1位、東京芸大2年）。高坂教子（東京芸大卒、イタリーで修業）。浜スミ子（ジュリヤードで修業）。の5名。

審査員は委員長がJ. カルベ氏（仏）。その他、相愛に公開講座に来た事のあるG. ブィオン氏（仏）、Y. ニーマン氏（英）、L. コーガン氏（ソ連）等13名。日本からは、東京芸大の岩崎洋三教授が審査員に選ばれて来ていた。

9日から第一次予選が始まったが、一人の弾く時間が30分かゝるので、9時半から午前中4人、昼は2時から途中3人で休憩して、6人で終るのが5時過ぎになる。1日10人で丁度だ。第一予選で弾く曲目は次のとおりである。

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴーのバイオリン教授法セミナー」

- ④ J. S. バッハの無伴奏パルティータ 3 番からプレリュード・ルーレ、ガボット（ロンド）。
- ⑤ パガニーニ24のキャプリースの中から、No. 1, 2, 4, 11, 12, 15, 17, 24の中から2曲選んで演奏。
- ⑥ M. ブルッフのコンツェルト op.26のフィナーレ。

会場のサルガボは、古い建物だが響きがよく、又日本と比べて空気が乾燥しているので楽器がよく響く。それにプログラムの最初の3人がソ連で、それが上手なので大変感が狂う。順番は本選迄変らない。何時も2位に入ったイリナ・イワノワと云うモスクーのコンセルバトワールの5年生の女性が最初に現われる。

技術面で一番感じた事は、右腕の技術が完璧な事、特にソ連の教育は徹底している感じた。ボーイングの柔らかかさと言うか、腕から肘、手首、指の関節まで、全部が関連性を持った柔らかさで動く。特に弦の移動において其の特徴が顕著に現われる。日本人の苦手なパガニーニのキャプリースの内の2番や12番等、実になめらかに動くのに感心した。日本人の演奏は、その点大変堅く感じた。特に肘が高く、肘が上ると肩迄一緒に上る感じで、元弓の時、顔と右肩が大変接近する。ボーイングをもっと研究すべきだと思った。

ピアノの伴奏者は、自分で連れて来る人、パリで頼んだ人等だが、国から連れて来るソ連の伴奏者が圧倒的に上手で大変な差があると思った。やはり政府が物質的にも精神的にも援助しているソ連の強みを、まざまざ見せられた感じである。2日間で第1予選を終え、その夕方、早速発表があった。20人の内13人が残った。内訳はソ連4人、日本4人（1人浜さんだけ落ちた）、ブルガリヤ2人、ポーランド2人、フランス1人で大体思った通りだった。

翌日は一日で第二予選が行なわれた。曲目は

- ④ フォーレのロマンス
- ⑤ ヴュータンのコンツェルト No. 5 第一楽章
- ⑥ ラベルのツィガース

やはり一人30分近くかゝる。

第一予選と同じサル・ガボで行なわれたが、前と違う点は、司会者が演奏者を紹介した後で、使用する楽器名も紹介する位だ。楽器名を司会者が云うと、二階の審査員の席がガヤガヤする。ソ連勢は、国が貸すので、ほとんどがストラディバリカ、ガルネリだし、外国の人であまり聞かない楽器だと審査員達が後の人と話したり、隣り同志でワイワイしゃべっているのが、すぐ隣のオブザーバーの席からよく見える。審査員には年寄が多く、居眠をしたりあまり態度はよくない。審査委員長のカルベ氏が小さな鈴みたいなのを持っていて、始まりや休憩の時にその鈴をチリンチリンと鳴らす。

ソ連勢は、相変らず着実に演奏する。決して素晴らしい演奏とは云えないのだが、ミスが少なく確実だ。左手の技術も欠点がない。

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴウのバイオリン教授法セミナー」

日本勢もいゝのだが、何か不安感が付きまとう。伴奏者にも差が出て来る。

ブルガリヤ、ポーランド等東欧諸国の人達もなかなかいゝので本選に残る6人は誰が出るか全然見当がつかなかった。

その日の夕方の発表で、ソ連3人（1人ラベルの最後で弦が切れた若い男の子が落ちた）清水君、ポーランドの女性とフランスの男の子が残った。フランスの男の子は上手とは思えなかったが、やはりフランスでやるコンクールだから残れたのだと思った。

翌日は1日休みで、私は印象派美術館に行ったり、昼間は相愛の子供の教室から桐朋に行き、現在パイヤールのバイオリンを弾いている森悠子さんと食事をしたり、サンラザールのコンセルバトワールや、近くの楽譜屋で楽譜を探したりした。夜はパリ管の演奏会を聞いた。パリ管はバレンボイムの指揮で、ミルシュタインのメンデルスゾーンのコンツェルトが素晴らしい演奏で感激した。

13日から、本選が始まる。この日迄サル・ガボが会場である。曲目は、

- Ⓐ モーツアルト、ベートーベン、ブラームス、ラベル、フランク、ドビュッシー、フォーレのソナタの中から任意の一曲。
- Ⓑ ルーセルのソナタ No. 2。
- Ⓒ 新曲、アブジルのシャコンヌ。

これだけの曲を本選に残った6人が弾く。この新曲は、このコンクールの為に作られた曲らしく、難解な感じで一つも面白くなかった。

又、ソナタでは伴奏者の差がものを云った。ソ連の伴奏者が素晴らしい演奏をしたのに比べて、清水君のそれは明らかに差がついた感じだ。特にソナタでは、ピアニストがバイオリンと同等、いやそれ以上に重要な役割をするから尚さらである。

最終日は会場をテアトロ・シャンゼリゼに移してオーケストラ（ラジオフランスオーケストラ）伴奏で行われた。

曲目は、前もってクラシックと近代の内から二曲提出しておいて、第二予選が通った所で抽選でどちらかが決まる。だから得意の方が当ればよいが、思う様にはいかない所が大変微妙だ。昼2時半から、前半の3人、夜8時半から後の3人が演奏した。

トップは相変わらず、ソ連のイリナ・イワノワ嬢 プロコフィエフの一番コンツェルトを弾いた。この曲は演奏効果があり、伴奏のオーケストラも変化がありオーケストレーションがいゝので上位3人がこの曲を弾いた。なかなかいゝ出来栄えだ。

二番目チョビ髭の27才、ヴィノクロフ氏、キエフで勉強した人、バルグのアンジェの思い出。難しい曲でサッパリ解らない面白くない曲だった。曲で損をしている感じ。

屋の部の最後は清水君。やはりプロコフィエフの一番を弾いた。少し気負ってる感じで二楽章等、オケと少し合はない所もあったが、とても音楽的だと思った。

夜8時半からの後半のトップは、フランスのジャック君25才（プログラムにはアメリカのジ

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴーのバイオリン教授法セミナー」

ユリアードで勉強と書いてある) サンサーンスの3番を弾いた。一楽章のテンポが遅く面白くない演奏、オーケストラでオーボエが飛び出したりしてその方が面白かったが、指揮者は年寄だがなかなか上手だ。

二番目がポーランドの29才のマグダレーナ・ニゾロフスカ嬢。ベートーベンのコンツェルトを弾いたが、一番抽運の悪かった方ではなかろうか。一番ミスのわかりやすい曲でよく弾いていたが、ミスが目立ったと思う。

最後がモスコ音楽院四年のプロズロフスキー君(22才)、プロコフィエフの一番、なかなか迫力のある演奏だった。一番のイリナ・イワノワさんとどちらが一位かと皆で噂していた。発表は夜11時半頃にあった。

カルベ審査委員長が他の審査員を随えて二階のバルコニーに出る。ステージには6人が並んで立っている。一位は最後に弾いた、プロズロフスキー。満場の拍手で少し前へ出て御辞儀する。二位イリナ・イワノワとソ連勢が取って、三位に清水君の名前が出た時には、私も飛び上りたい気持だった。

四位ソ連のチョビ髭のヴィノクロフ、五位ポーランド、六位フランスの順だった。

やはりソ連勢が上位をしめたが、清水君の三位入賞はよく頑張ったと思う。

然しこのロン・ティボーコンクールを聞いての印象は、ソ連勢の欠点の少なさ。決して、面白い強烈な印象に残る演奏とは思わないのだが、外と比べて、やはり欠点がないと云うより仕方がない。やはり教育が徹底している感じである。又、これだけ膨大な曲を弾きこなすには、今日本でやっている様な、一曲すんだらお終い。又一曲に半年も一年もかゝっている様では、とてもこの水準まではいけそうもないと思った。技術的な事では、ボーイングのなめらかさ、左手の正確さ等、随分と参考になった。

ロン・ティボーコンクールのバイオリン部門も終り、22日から始まるグラスゴーのセミナー迄、丁度一週間程時間があつたので、その間に、フランスから西ドイツには入った所ザールブルッケンに、相愛の卒業生である木場俱子さん一家が住んでいるので、そこに二日程お邪魔した。皆様も御承知の様に木場さんは、5年前に入試判定会議の席上で急逝された木場集三さんのお嬢さんで、バイオリンで相愛を卒業し、ベルリンで勉強して現在ザールブルッケンで、セロの御主人と市のオペラ座でバイオリンを弾いていて、妹の時子さん(相愛中退)やお母さんも今、市の郊外に一軒貸りて住んでられる。

皆さん元気で妹の時子さんも日本にいた時よりすっかり元気になり、彼女にはドイツの方が合っていた様に思われる。時子さんとハイデルベルグに行ったりしてすっかり楽しんだ。その後、デュッセルドルフで相愛高校卒業後国立音楽大学に行き、卒業後デュッセルドルフで勉強している尾関えりかさんに会ったりして、ロンドンに渡り22日にグラスゴーに到着した。

グラスゴーはイギリスの北スコットランドのローランド地方の町で、工業都市として発達して来た。タータンチェックやバグパイプ等有名である。音楽(芸術)は隣のエディンバラの方

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴウのバイオリン教授法セミナー」

が盛んで、今迄余り関心が無かったが、熱心な人がいて二年前にジュニアバイオリンコンペティションを始め、今年はその第二回目である。

此度は、そのコンペティションにバイオリンティーチングのセミナーを加えて6月22日から行なわれた訳である。予定としては23・24日をセミナー。25・26日コンペティション予選。27日セミナー。28日(土)に本選と云う具合になっている。

まずセミナーの方から説明しよう。

セミナーは、各国の代表が集まって、一つのテーマに対して講義し又議論する会である。

テーマは前もって五つ決めである。

- ① 初歩のバイオリンの教授法。
- ② バイオリニストを如何にして上手に作るか。
- ③ ボーイングの技術について。
- ④ バイオリンの技術的欠陥を補う方法。
- ⑤ 音楽学校の特別なやり方とその結果について。

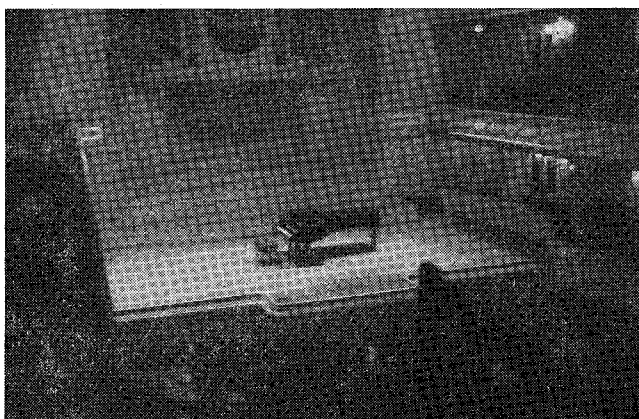
この五つの主題に対して、一つの主題に三人が各々20分程スピーチをし、その後室を別にして、グループディスカッションするわけである。

会場はグラスゴウ市内のフィルムシアターで、議長はイフラー・ニーマン氏。

彼は現在ロンドン・ギルドホールの音楽学校の先生だが、パリでカール・フレッシュ、ジャック・ティボー、マックス・ロスタールに師事し、最近名声の上っている先生である。その他、有名なM. ロスタールやユードイ・メニユーヒン等が特別講師で出席している。その他に、



ロン・ティボー予選会場 サル・ガボ



ロン・ティボーコンクール会場 サル・ガボ・ステージ

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴーのバイオリン教授法セミナー」

オーストリア、オーストラリア、ベルギー、ブルガリア、イギリス、フィンランド、西ドイツ、ギリシャ、オランダ、ハンガリー、イスラエル、ポーランド等各国から代表が出席している。私も日本代表として出席したわけである。我々の宿舎は、グラスゴーの郊外のグラスゴー大学の寮の様な所で（Wolfson Hall と云う）廻りは牧場で実に素晴らしいスコットランドの田園風景の所だ。

そのウォルフソンホールで朝食をして、9時頃にバスが迎えに来て、皆でフィルムシアターに行く、昼食は市内のアートセンターでして、夕方終ると又バスで帰って夕食、とまるで修道院の様な世活である。夜は10時頃まで明るいし、近くに飲屋もないし、本場のスコッチウイスキーを買いに行く所もない、寂しい所だ。

最初の日午前のテーマ（初歩のバイオリン教授法について）でセミナーが始まった。ステージに議長とスピーカーが座り、向い合った客席で我々が聞く。トップにエディンバラの学校の先生をしている L. O'Riordan 氏の話で始まった。英語も早口なので殆んど解らないが、通訳にロン・ティボーコンクールに出た、僕の昔の弟子の武谷きみよさんを頼んであったので後で大よその説明をしてもらう。それによると、あまり小さい時からやらせないらしい。レコードを出して説明したり、鈴木メソッドの名前が出たりしていた。実験的ではあるが、サードポジションから始めさせた方が、Cdur から始められるのでよいと思うとか、実直なスコットランド人らしい話だった。

二人目は西ドイツの Assmann さん、英語と独乙語と両方で話をした。西ドイツでは、自然を尊んで無理をして梓にはめての教え方はさせない事を強調していた。

三人目はオーストラリアの Hendrickson さん、雌ん鳥みたいな顔の女性だが、色音符の様なものを持ち出して説明していた。又オーストラリアでは、鈴木メソッドが大いに普及しているとの事、彼女も鈴木メソッドの信奉者の様だ。3人の話が終わってお茶の後、下の部屋で少人数に別れてのディスカッションになる。英語、独語、仏語等に分れて人の名前が紙に張り出してある。私は Group I 英語に入る。最初に話をした O'Riordan さんが議長で輪になって5、6人で討論する。勿論記録の為録音もする。何才位から始めるか、左手の型を作るのにピッチカートからやらせるべきだとか、最初サードポジションから始めるのはどうだとか、皆どどん質問し、それに答を出す。実に活潑な意見だ。私が日本人だからだろう、鈴木メソッドに関して、質問が集中して来る。大変皆が興味を持っている事がわかる。たゞ残念なのは、日本の初歩教育がすべて鈴木メソッドで行なわれていると、思われている事なので、私はこの様に答えた。

「鈴木メソッドは多くの人々が取入れてはいるが、日本のバイオリン教育のすべてではない。勿論私も違ふし、反対に鈴木メソッドで習っていて、そのメソッドに疑問を持つものが私の方にかわってくる」と説明しておいた。昼食後、今度はバイオリニスト作りの方法の問題についてのセミナーに入る。

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴーのバイオリン教授法セミナー」

最初のスピーカーは、朝我々のグループにいた Mr Ralph Holmes さん（ソリストとしても活躍しているらしい英国人）の話。後で武谷さんに聞くと、テクニックと頭の問題で、どちらが先行するかについて話をしていたらしい。この頃は、テクニックに走り過ぎて感情の表現が後になり過ぎる傾向が多いと云うわけだ。

二番目、フィンランドの Angerio さん、フィンランドの教育方法を話していた。

三番目、ギリシャの女性、独乙語しかしゃべれないので、議長のニーマンさんに英語の原稿を渡して、スピーチはニーマンさんが初見なのでと前置きして話した。

後のグループディスカッション、今度は Holmes さんが議長で、ヴィブラートの問題、ポジションの問題等色々話をした。話がわからないので一生懸命聞こうとするので大変疲れる。

6月24日、セミナーの第2日目 Subject 3 のボーイングについて。このセミナーのメインイベントの感じだ。

最初は議長の Y. ニーマンさんが話をした。録音したら30分充分あったが、解りやすい英語での話だった。

右手の弓を持つ指の関節を柔かくする事だの、力は二分位で持つべきだとか、関節、手首、肘、腕、肩の運動の関連性等くわしく説明をした。

次の M. ロスタールさんのスピーチ、彼は実際にバイオリンを弾いて、音を出して説明してくれるので大変解りやすい。音に語学は必要としないから。ポルタートとレガートの違い、スピッカートの弓の場所、駒からの場所の違いでどの位音が変わるか等、音で説明してくれて一番勉強になった。ロスタールは、カール・フレッシュの弟子で、やはりフレッシュ系統の理論だと云う事がよく理解出来た。

最後はブルガリヤの A. Penkova さんの話、ポーランドの女性が英語に通訳してしゃべっていたが、舞台上で上らない事だとかの説明だったらしい。ボーイングとは大分話が違っていた様だ。

昼からの Subject 4、技術の欠点の直し方について、最初のスピーカーは、イスラエルの R. Shevelov 氏、大きな人だ。肉体を自然にさせる事によって音楽が出て来る。無理をさせない心から音楽が出て来るのを待つべきだと云う意見、バイオリンの持ち方だとか、弓の持ち方がどうのこうの一切云はない。すべて自然であるべきだと云う。後で武谷さんに聞くと、すばらしいお弟子さんが一人いて今度ニーマンさんに付けたらしいが、その一人がたまたま成功したからと云って、全部他に当てはめるのは無理ではないかと思ったが面白い理論だ。

次のポーランドの O. Ruppel さん通訳入りで話をして、バッハ時代の音楽を無理にダイナミックを考えるべきではないとか、f、p だけでクラブサン等も大きさの変化がない等の話。

この日のグループディスカッション。朝はドイツのアスマンさん。昼はシェプロフ氏が議長のグループだったが、それ程の収穫なし。この日の夜の市長公舎での晩餐会は大変豪華で楽しかった。

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴウのバイオリン教授法セミナー」

次の2日間はコンペティションなので、その話は後にして、27日のセミナーとしては3日目の事を話します。

この日の朝、議長団の人達の車が遅れてなかなか到着しないので、別の人が議長になって始まった。

音楽学校の特殊教育について。

最初の話は、ポーランドのワルシャワ音楽院副院長の Brzeuski 教授。ドイツ語で話し、議長が英語に直す。

ポーランドの音楽教育についての話だが、ポーランドではバイオリン教育が徹底しているらしい。6・5・5制の16年間の教育をするが、最初は先生の方から、*「お宅の皆さんに音楽をさせて見ませんか、と云う問いかけから始まる。153の音楽小学校で、始めはバイオリン・チェロ・ピアノのどれでも自由にやらせて、やって行ける様になると38ある音楽中学に行く。その間、途中で普通の学校へも、そちらからでも転校は自由である。中学には入る程度は、3オクターブのスケール。ダブル。クロイツェルのエチュード。ヴィオッティ、ベリオ位は弾けないと入れない。中学を5年やって出る時には、パガニーニのキャプリース。ウィニアウスキーのポロネーズ、バッハ等が弾けないと、上の大学（アカデミー）に行けない。大学に入ると2年ごとにフェスティバルがあり、そこで演奏する事が義務づけられている。その曲目等は委員会の先生達が、決定してやる。又、先生になるコースも今作っていると云う。何かシステムが徹底してうらやましい様な話だが、大変興味があった。*

次にスコットランドの人の話の後、私が壇上に上って、日本の音楽学校の現状に関して20分程英語のスピーチをした。と簡単に云えるのだが、その前の準備には大変難儀した。まず日本にいる時に、日本語の原稿を書き、それをアメリカ人の日本語に堪能な人に読んでもらい、英語に直してもらって、その原稿を持って一生懸命練習した。始め25分位かゝったのが、約20分程に縮める事が出来る様になったが、発音も悪く大分武谷さんに聞いてもらい直されたりした。

話の内容は、日本の音楽教育は、専門の音楽の学校は高校以上しかない事。その為、それまでのバイオリンのレッスンは個人教授に頼る他ない事。それも義務教育では音楽の時間はバイオリンには冷淡で、歌を歌い音楽を鑑賞する他は、リコーダーかハーモニカを楽器としてやらせる位だとか、義務教育では進学の勉強が急がしくて、始め多くやっていたバイオリンの生徒が高校受験の頃にはずっと少なくなってしまうとか。大学卒業後も就職が困難でオーケストラに入れるのは、10%程度だとか話したが、最後に子供の音楽教室制度の事を詳しく説明し、特に相愛でやっている弦の単位試験のグレードの表を英語に直して皆にくばり、この様なシステムでやっている事を大いに宣伝した。この単位表は、外に見せても決して恥かしくない制度だと、自信を持って紹介した。

後で何人かの人が、よかったと握手を求めて来た。又原稿をコピーしてほしいと云って来た

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴウのバイオリン教授法セミナー」

人も何人かいる。私のスピーチが解らなかったのかも知れない。

昼からは、話の外に映画でチェロの先生のボーイングの説明があったりして、なかなか活潑な意見が出てこのセミナーは終わったが、このセミナーで感じた事は、やはり語学力が無いと駄目だと痛切に感じた。ヨーロッパの人達は自国語以外に最低一つは他国語がしゃべれる。然し色々な国の人々が感じ、勉強している音楽に対する態度はあまり変わらないが、色々研究して来て一堂に集まって発表し合うセミナーの有意義なのに、とても勉強になったと思う。

最後に同時に行われたジュニア・コンペティションについて簡単に述べたいと思う。

このコンペティション（コンクール）は2年前に同じグラスゴウで始めて行なわれ、今回は第2回だが、13才から18才迄の少年少女を対象に行われ、未だ世界的にはあまり知られてないがジュニアとしては国際的に立派なものである。審査員は、委員長がロン・ティボーの審査員だったY. ニーマン氏、その他のメンバーは、M. ロスタール（スイス）、V. アブラモフ（ベルギー）、I. エヘンデル（カナダ）この人も有名な人、I. ボイク（ルーマニヤ）、R. ホームズ（イギリス）の計6人。

課題曲は予選では

- ① バッハのソロソナタ No. 2 又は No. 3 の 3 楽章
- ② ベートーベンのソナタ No. 1 の 1 楽章
- ③ 新 曲
- ④ サンサーンスの序奏とロンド・カプリチオーソの 4 曲

本選はメニューヒン指揮のスコットランド室内オーケストラの伴奏で、モーツアルト No.5、メンデルスゾーン、ブルッフの1番のコンツェルトの内から好きな一曲を弾く。

25日と26日の2日間、予選がセミナーと同じフィルムシアターで行われた。参加者は20名で1日10名だが、1人30分は充分にかゝる。やはり年令が日本で云えば中学、高校の頃だから、サンサーンの様な大人の曲は、音楽的な表現に無理があり、完璧に弾いた子はいなかったが、バッハやベートーベンはしっかり弾いているのが多かった。新曲もなかなか難かしく、日本のコンクールにはないので私には驚異だった。

色々な国から出演していたが、地元のイギリス人は無器用なのか、上手なのはいない。特にスコットランドが一番下手で、セミナーの先生方の発言と裏腹の感じである。三番目に弾いた西ドイツの男の子、金髪で始め女の子と間違いしたが割合上手。ロスタールの弟子だ。

五番目に出たルーマニアの16才の女の子がとても音楽的で上手だった。

昼からの部では最初に弾いた14才の南アフリカの男の子と最後のアメリカの女の子が上手だった。

二日目の方は特に素晴らしいのはいなかったが、大体東欧圏の子が上手い。やはり組織的な教育を受けている結果だと思う。

二日目の夜発表があったが、結局、前日に弾いた西ドイツのシュワルツ君（17才）、ルーマ

ニアのマーティン嬢（16才）、アメリカのチーズ嬢（17才）、後の日に演奏したオランダのツェンデン君（14才）の4人が本選に進む事になったが、他に8人のマスタークラスが選ばれた。このマスタークラスに選ばれた人達は、本選の前日、メニューヒンの話の後で、もう一度皆の前で弾く機会があたえられる。そしてその一人一人の演奏を、すぐ前に審査員がいて、一人づつ批評する。時には審査員同志が意見が違って討論する場面もあり面白かった。ロスタールは相変わらず、自分でその子の楽器を持って実際に演奏して示していた。然しこのやり方は大変に効果があり、日本でも応用すべきだと思った。

愈々コンペティションのフィナーレの日。夜7時からグラスゴウのシティホールで本選が始まった。広い会場が満員で人の熱気で暑い。

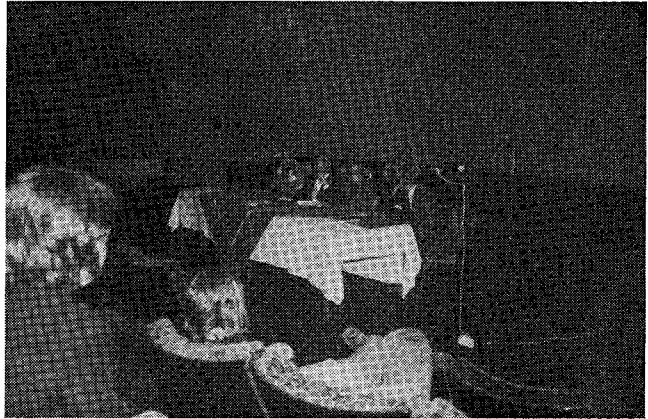
メニューヒンの指揮でスコットランド室内オケの伴奏で始まる。3人がブルッフを弾き1人がメンデルスゾーン。曲から来る感じは、ブルッフの方が得だと思う。

トップは西ドイツの子、割合上手。オケはまあまあだが、メニューヒン棒は下手。あれだったら僕の方がましかなと思う位。二番目のオランダの最年少の子。どンドン走って先に先に音が出る。2楽章で弦がゆるんで、この子が4位になるのは明らか。

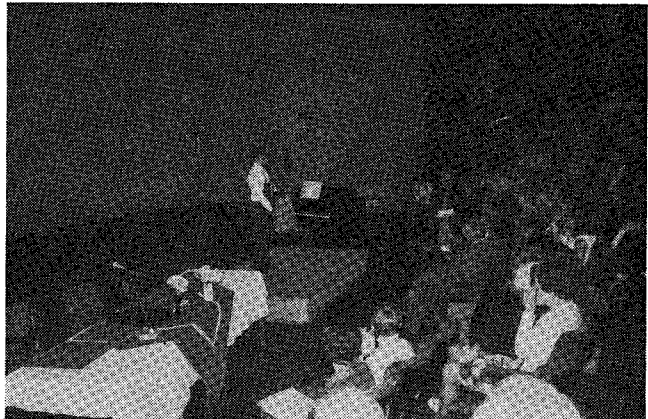
休憩後、ルーマニアの女の子のメンデルスゾーン。抜群に上手。大人の演奏だった。

最後のアメリカの女の子のブルッフ。思ったより音が冴えず予選の時の方がよかった。

結果は、やはり一位がルーマニアの Mihaela Martin 嬢（16才）。2位が U. S. A の Stephanie Chase嬢（17才）。3位西ドイツ Michael Schwarz 君（17才）。4位と新曲賞を



グラスゴウ セミナー会場 ステージ



マスタークラスの演奏

「ロン・ティボーコンクールとグラスゴアのバイオリン教授法セミナー」

オランダの Van Zweden 君（14才）と決定した。

日本人は誰も出なかったし、ソ連からも来ていない。未だそれ程知られてないから、国際的と云ってもまだ規模も小さいが、レベルはなかなかのもので、特に一位になったルーマニアの子等何処に出しても立派なものである。

私も「日本の子を連れて来たら？」と、たえず比較して聞いていたが、学生コンクールの全国一位の子を連れて来ても優勝はむつかしいのではないかと思われる位である。

特に東ヨーロッパ系の子供達は、指導者にも恵まれ、これから益々伸びて行くのではないかと思われる。

日本でも、この様な国際コンクールにどんどん優勝する子を育てなければと痛切に感じた事を最後に拙文の筆を置く。

(大学音楽学部 教授)